

ビジネス英語教育と検定・資格試験

関根 幸雄

(受付 2000年10月4日)

I. はじめに

今日、我が国の大学において、ビジネス英語や商業英語等の学科目名にて、さまざまな内容のビジネス英語教育が行われている。その教育内容は、従来の貿易通信文を中心とする狭義のものと、貿易に限らず広くビジネスの場における英語とする広義のものに大別される¹⁾。

筆者は、勤務校にてこれら狭義と広義のビジネス英語に対応した2種類のクラスを開講してきた。そして、実社会における資格志向に鑑み、受講する学生に対して、狭義のビジネス英語クラスにおいては商業英語（国際ビジネスコミュニケーション）検定試験、広義のビジネス英語クラスにおいてはTOEIC（Test of English for International Communication）の受験を義務づけている。

本稿は、筆者のこれまでの教育経験を踏まえながら、ビジネス英語教育と関連の検定・資格試験に関し、現状と今後のあり方について考察を試みるものである。

II. ビジネス英語教育の現状

全国の大学においてどのようなビジネス英語教育が行われているのか、筆者は過去2回にわたり実態調査を行った。また、筆者の勤務校における状況についても併せて述べてみることにする。

1 学科目名と講義内容

実態調査は、講義要項を各大学の教務担当から取り寄せる方法により行った。1回目は、1994年8月、日本商業英語学会会員が所属する4年制大学76校を対象に実施した。学科目名および講義内容についての概要は以下のとおりである²⁾。（回答数68校、回答率89%）

- 1) 狭義および広義のビジネス英語について、羽田三郎改訂『英和貿易産業辞典』（研究社）では「わが国の立場からは、狭義には『貿易用』からあらゆる実務活動に及び、さらに企業活動が全世界的になるので、ひろく内・外の実務の場における英語を指す」と説明されている。
- 2) 拙稿「商業英語教育の現状と今後の方向」（『日本商業英語学会研究年報』第54号、日本商業英語学会、1995年）73-75ページ参照。

商業英語 32校

—貿易通信文 (26校), ビジネス・レター (貿易通信文, 社交通信文など) (4校)

ビジネス英語 9校

—貿易通信文, ビジネス会話・オフィス会話, 各種レター

ビジネス・イングリッシュ 4校

—貿易通信文

その後, 2回目の実態調査を, 1997年8月, 日本商業英語学会会員が所属する4年制大学84校を対象に実施した。その概要は以下のとおりである³⁾。(回答数75校, 回答率89%)

商業英語 27校

—貿易通信文 (17校), ビジネス・レター (貿易通信文, 社交通信文など) (6校)

ビジネス英語 12校

—貿易通信文 (7校), 会議・交渉・プレゼンテーション (3校)

ビジネス・コミュニケーション (論) 8校

—貿易通信文 (5校)

ビジネス・イングリッシュ 7校

—貿易通信文 (2校), ビジネス・レター (貿易通信文, 社交通信文など)

これら2回の実態調査から, 商業英語という名称が最も多く使われており, 広く定着・浸透していることがいえる。一方, ビジネス英語, ビジネス・イングリッシュを用いる大学もそれぞれ3校ずつ増えている。最近ではビジネス・コミュニケーション (論) という名称の台頭が目覚ましく, 国際ビジネス・コミュニケーションを含めると12校となり, ビジネス英語の12校に並ぶのが注目される。

講義内容については, 貿易通信文を中心としながらも, 各種ビジネス・レターや会議・交渉・プレゼンテーションなど広がりが見られつつあるようである。ただし, 学科目名が多様化してはいるが, 依然として貿易通信文が主流であることに変わりはないといえよう。

中野宏一神奈川大学教授も1997年に日本商業英語学会正会員200名を対象としたアンケート調査を実施している。その結果によると, 「……130名の会員から回答をいただいた (回答率65%)。……最近10年以内に『商業英語』の科目名を変更した大学・短大の学部, 学科数は50で, とりわけ最近5年間で43に達している。新しい名称は, (国際) ビジネス (英語) (イングリッシュ) が30, (国際) ビジネス・コミュニケーション (論) が11, 貿易英語が5, その他4で計50となっている」⁴⁾ という。同年の日本商業英語学会全国大会にて配布された中野教

3) 拙稿「広義の商業英語教育への一考察」(『日本商業英語学会研究年報』第58号, 日本商業英語学会, 1999年) 62ページ参照。

4) 中野宏一「貿易取引形態の変化と企業内国際コミュニケーション」(『日本商業英語学会研究年報』第57号, 日本商業英語学会, 1998年) 52ページ。

授の資料には、商業英語の科目名の回答数は33とあり、次いで僅差で（国際）ビジネス（英語）（イングリッシュ）30となっている。

筆者の2回目の1997年調査では、商業英語27、（国際）ビジネス（英語）（イングリッシュ）に該当するものは20になる。中野教授の同年調査と比較すると、商業英語についてはそれぞれ27と33で多少違いはあるものの、（国際）ビジネス（英語）（イングリッシュ）ではそれぞれ20と30で1.5倍の相違がみられる。これらの数値の差異については、調査結果を詳しく分析しなくてはならないが、①4年制大学だけとするのか短大も含めるのか、②教務担当とするのか会員とするのかという調査対象の違いのほか、講義要項を取り寄せるのかアンケートに回答してもらうのかという調査手法の違いなども影響していることが考えられる。

2. 筆者の勤務校における状況

勤務校において筆者は、ビジネス英語の科目名にて貿易通信文を中心としたクラスおよび広義のビジネス英語教育の1つとしてのTOEIC対策クラスの2つの講座を通年で開講している。いずれも選択科目であり、過去6年間の履修者数は次のとおりである。

科目名	95年度	96年度	97年度	98年度	99年度	2000年度
ビジネス英語 (貿易通信文)	18名	26名	19名	33名	59名	35名
ビジネス英語 (TOEIC対策)	35名	16名	30名	64名	32名	54名

注：97年度までは3年次配当科目であったが、98年度からは2年次配当科目に変更となった。

両クラスとも、98年度に配当年次がそれまでの3年次から2年次に変更となったため、同年度を境に履修者数は増えているものの、年度により増減がみられる。両クラスの履修者数の合計をみると、98年度97名、99年度91名、2000年度99名といずれも90名台で推移しており、学生からの一定のニーズはあるものと思われる。

3. 問題点

ビジネス英語教育ではどういった問題点があるのか、日本商業英語学会の研究年報に掲載された論文から整理してみることにする。

(1) 狭義のビジネス英語の場合

則定隆男関西学院大学教授は「国際取引に用いられる英語、いわゆるビジネス英語に興味を持ち、学び始める人は多い。しかし、その興味を持続させることのできる人は少なく、また、必要に迫られ学んではいるが、学習自体を面白いと感じている人も少ないように思える。

……ビジネス英語のテキストは、数多くの英語表現を列挙し、これを暗記、もしくは模倣することを強いている。これが学習を無味乾燥なものにしているようである⁵⁾という。また、椿弘次早稲田大学教授も「今のままなら、学生に関心を持たせるのに悪戦苦闘する⁶⁾」との意見であり、この学生に関心ということについては、狭義のビジネス英語教育にみられる問題点の1つといえるのではないだろうか。

貿易を専攻する学生を対象とするのであるならば、貿易通信文だけでよいのではないかという意見があるかもしれない。たしかに、我が国における貿易の重要性に鑑み、貿易通信文を中心とする狭義のビジネス英語教育に対してそれなりのニーズはあろう。しかし、その場合でも、グローバル化時代の今日、ビジネスマンの教養として専門分野だけではなくより広い知識や視野が不可欠ではないかという意見がある。『ビジネス英和辞典』の編著者である築田長世氏は「グローバル化は、ビジネスマンの活動が地理的に一国内では収まらないことを意味するが、ビジネスマンの専門分野についてもある種のグローバル化が起きているように思われる。地球環境問題を考えても、世の中の事象は分かちがたく結び付いていて、あることとの理解には関連分野や一見無関係な事柄の知識や理解も必要だという認識が深まりつつある。ビジネスのどの分野で仕事をしていても、関連分野や学際的な知識をある程度守備範囲に入れておくことが、これからは必要ではなからうか⁷⁾」と述べている。これは、ビジネス英語教育についてもいえる指摘と受け止めている。

(2) 広義のビジネス英語の場合

信達郎東洋学園大学教授は「実情を考慮し、業種を広く包括した国内外のオフィスで使用されるビジネス環境に準じた英語表現を最大公約数的にとりあげる教材の開発が必要とされているのではないだろうか⁸⁾」と広い分野を包括したビジネス英語教材の必要性を述べている。たしかに、出版されているビジネス英語の大学テキストは、その大半が貿易通信文を中心にした内容であり、広義のビジネス英語に関わるものはまだ少ないのが現状である。

則定教授は「現在多くの大学で商業英語、ビジネス・コミュニケーション、あるいはそれに類似した名称の科目がおかれているが、果たしてそこで教授されている内容は共有点を有しているのだろうか⁹⁾」という問題提起をしている。教授内容が多様化してくれば、相互の関連性や繋がりについて問われるのは当然のことかもしれないが、対象とする分野・領域が広がってくると、混沌としてくるのはある程度やむを得ないのかもしれない。この点につい

5) 則定隆男『ビジネス英語を学ぶ・考える』, 英宝社, 1990年, 3ページ.

6) 『日本商業英語学会研究年報』第49号, 日本商業英語学会, 1990年, 91ページ.

7) 築田長世『ビジネス英和辞典』, 研究社, 1998年, Vページ.

8) 信達郎「タイムの英語とビジネス英語教材としての意義」(『日本商業英語学会研究年報』第52号, 日本商業英語学会, 1993年) 89ページ.

9) 則定隆男「個別的研究の統合化」(『日本商業英語学会研究年報』第54号, 日本商業英語学会, 1995年) 2ページ.

て、筆者は、羽田三郎青山学院大学名誉教授の批評眼としての「英語・商務・心理の総合」¹⁰⁾という捉え方に着目したい。羽田教授は「Business English を学習・研究する方法の大きな特色は、英語だけを対象に英語学をやるわけではないことである。ビジネスの世界で、人が、ビジネスの促進・遂行のために、相手を動かして所期の効果をあげようとする、そういう場合のコミュニケーションを立体的・総合的にとらえる必要がある」¹¹⁾と述べている。現実体そのものが混沌としているので、狭義から広義へのビジネス英語教育を展開する上で、則定教授がいうように共有点なり共有するベースがないと体系的にまとまりのないものになってしまうであろう。筆者は、広義のビジネス英語教育においても、羽田教授の「英語・商務・心理の総合」という捉え方を踏まえて実践する必要があるのではないかと提言したい。

その他、筆者は、ビジネス英語という科目名にて TOEIC 対策のクラスを開講しているが、単なる TOEIC 対策とはどう違うのかという問題はあるかもしれない。TOEIC の出題形式はマークシート方式で、限られた時間の中で沢山の問題に解答しなくてはならないため速読・速解や大意把握が求められる。したがって、要点となるところをおおよそ理解しておけば、難易度の高い問題は別として、与えられた選択肢の中から正答を選ぶことは可能なように思われる。しかし、実社会ではマークシート方式のような問題設定はまずあり得ないので、TOEIC 対策クラスでは TOEIC 教材を用いながらもきちんと内容を理解するだけでなく記述式にも対応できる力を養成すべく配慮している。

III. ビジネス英語関連の検定・資格試験

まず、本稿の題名にもあるように検定・資格試験という名称を用いたことについて説明しておくことにしたい。ビジネス英語関連の試験として、商業英語（国際ビジネスコミュニケーション）検定試験のほか TOEIC, Business English Standard Test（ビジネス英検）, Businessmen's English Test and Appraisal（BETA）などがある。商業英語（国際ビジネスコミュニケーション）検定試験は A クラスから D クラスのグレード別になっており結果が合否で示される検定試験であるが、TOEIC やビジネス英検などは結果がスコアで示される測定テストである。したがって、こうした性質の異なる試験を検定試験もしくは資格試験という名称で一括りにするのは適当ではないと考え、本稿では検定・資格試験と表記することにする。

最も重要なビジネス関連の英語検定・資格試験として、信教授は「日本商工会議所が主催する準国家試験としての商業英語検定、（財）日本英語検定協会が主催するビジネス英語検定、

10) 羽田三郎『ビジネス英語正攻法』（ビジネス・シリーズ）、研究社出版、1988年、55ページ。

11) 羽田三郎『最新ビジネス・イングリッシュ』、有斐閣、1982年、8ページ。

それに世界共通の尺度から英語能力を判定するビジネスマン向けの TOEFL とでもいうべき TOEIC¹²⁾ を挙げている。そして、同教授はこれら 3 つの検定・資格試験に共通するビジネス英単語を各分野ごとにまとめられており、出題される単語についても共通性があるようである。

これら 3 つの検定・資格試験の中、筆者は実社会における評価や知名度などを考慮し、前述のとおり、ビジネス英語クラスの受講者に対し商業英語（国際ビジネスコミュニケーション）検定試験ならびに TOEIC を学習目標として取り上げ受験を義務づけている。以下、双方の試験について述べてみることにする。

1. 商業英語（国際ビジネスコミュニケーション）検定試験

この検定試験は「国際貿易の進展にともない、貿易業務は日増しに増大複雑の傾向にあり、この際語学にたんのうな貿易実務者を養成、確保することは、企業経営の健全化に寄与するところが少なくないと信じます。このような観点から、日本商工会議所ならびに各地商工会議所は、わが国貿易振興の一環として、商業英語検定試験を統一した基準によって実施する……」¹³⁾ という趣旨にもあるとおり、発足当時の社会的要請に応え、貿易英語の色彩が強いものとなっている。

1995年12月、試験規則等が改定され、それまでの名称であった商業英語検定試験から商業英語（国際ビジネスコミュニケーション）検定試験となり、カッコ書きながらも「国際ビジネスコミュニケーション」という表現を併記し、この表現を通称として使うことになった。さらに、1999年11月、試験規則の一部改定が行われ、C・Dクラス¹⁴⁾ においては出題内容の見直しが行われビジネス英会話表現が新たに出題されることになった。

このように、いわば貿易英語の検定試験とでもいえるものであったが、国際ビジネスコミュニケーションということを念頭において、従来の貿易に関わる英文解釈や英作文のほかに会話表現も出題されるようになってきた模様である。

Cクラスについて、主催団体である日本商工会議所が作成したサンプル問題の一部を引用することにする。

[例題]

英文解釈

- (1) As our customers are in urgent need of this article, please make the shipment as soon as possible.

12) 信 達郎『ビジネス・商業英語検定試験に共通の英単語』、南雲堂フェニックス、1992年、3 ページ。

13) 日本商工会議所編『商業英語検定試験問題集（C・D編）』、日本商工出版、1994年、3 ページ。

14) この改定により、Cクラスは大学在学程度とそのままであるが、Dクラスは高等学校在学程度から高等学校～大学初級程度に変更となった。

- (2) We are one of the leading exporters of Japanese handicrafts and wish to establish business relations with you.

英作文

- (1) 悪天候のため、当社の売上げはかなりの減少を見せました。
(2) もしその品が満足できるものであれば、少なくとも100ダースは注文する予定があります。

ビジネス英会話表現

[(1)] a white one or a colored one?

(1)の空欄に「関心がある」という日本語に対応する英語を正しい文型で書きなさい。

May I try it ((2)) ?

(2)の空欄に適切な前置詞を英語で書きなさい。

このように、この検定試験の特徴は記述式となっていることである。従来は、主に商用文 (business correspondence) の読解力および作文力が試されてきたが、2000年度からは上記のようなビジネス英会話表現が新たに出題されることになった。

解答例 (筆者作成案)

英文解釈

- (1) 当社の顧客がこの商品を緊急に必要としておりますので、できるだけ早く船積みをしてください。
(2) 当社は日本の工芸品の主要な輸出業者の1つで、貴社と取引関係を樹立いたしたく存じます。

英作文

- (1) Because of bad weather, our sales have shown a considerable decline.
(2) If the item proves to be satisfactory, we plan to place an order for at least 100 dozen.

ビジネス英会話表現

- (1) Are you interested in
(2) on

2. TOEIC (Test of English for International Communication)

実社会では英語能力のものさしとして TOEIC のスコアを用いるところが増えてきている。TOEIC とは、米国のテスト開発の公共機関である Educational Testing Service (ETS) が TOEFL の膨大なデータをもとに開発した英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界基準のテストのことである。TOEIC 運営委員会によると、日本ではこれまで約2,500の企業・団体に利用されており、1999年度の受験者数は公開テスト・団体特別受験制度を合

わせて87万人を越えたという。こうした状況を反映して、就職活動を控えた学生の関心も高くなってきている。

このテストは、知識を測るよりも激しい運用に耐えるかどうか、コミュニケーション能力を測るという¹⁵⁾。従来の英語教育は知識中心とか文法・訳読式による精読中心の傾向が強く、運用よりも知識、また速読よりも精読が重視されてきた。TOEICは、運用と速読というこれまでの英語教育で欠けていた部分を求めてきているといえよう。

羽田名誉教授は「たしかに日本人の場合は、この試験が目指すようなコミュニケーションの能率を高めることが急務ではあるが、ビジネスの世界では……4技能のいずれも軽視できない。特に作文の巧拙は大きな問題である。TOEICやTOEFLで高得点の人でも……書き物が満足にできない人もある」¹⁶⁾との指摘に留意する必要がある。

TOEIC運営委員会が作成したテスト案内に掲載されているサンプル問題の一部を引用することにする。

[例題]

Part II (応答問題) (いずれも音声のみ・実際の問題用紙には何も印刷されていない)

Have you ever been to the United States before?

- (A) Yes, it's my first trip.
- (B) Only once.
- (C) No, I was here last year.

Part V (文法・語彙問題)

(1) He was too ... to lift the heavy package.

- (A) surprised (C) strong
- (B) far (D) weak

(2) Milk loses its vitamin D content if left at a temperature of 55 degrees ... for five hours.

- (A) and more (C) and beyond that
- (B) or above (D) or else greater

Part VI (誤文訂正問題)

(1) At first the old woman seemed unwilling to accept anything

A

B

that was offered her by my friends and I.

C

D

15) 羽田, 前掲書 (注10), 157ページ参照.

16) 同上書, 157ページ.

(2) The pamphlet contains some useful informations.

A B C D

Part I から Part IV までがリスニングセクション，Part V から Part VII までがリーディングセクションとなっている。限られた時間でこうした問題に解答しなくてはならないので，英語の運用力が身につけているかを見ることに主眼を置いているといふ。

解答

Part II (B)

Part V

(1) (D)

(2) (B)

Part VI

(1) D

(2) D

3. 受講生の反応

(1) 商業英語（国際ビジネスコミュニケーション）検定試験

これまで，受験した受講生からは次のような感想がみられる。

—商業英語は今まで習ってきた英語と違って，専門的な知識を必要とするし，独特な言い回しがあってこういう英語が存在するんだと新発見した気分だった。

—和訳はそんなに難しいとは思わなかったけど，英作文は手がでなかった。

—英訳の方がとても難しかった。授業をもっと大切にして，日々努力するべきだったと反省している。

—高校時代，数多くの試験（簿記，情報処理，ワープロなど）を受けてきたが，今まで受けてきた中で一番難しかった。マークシートではなく，記述式だったので，全文を理解しておく必要があった。

こうしてみると，学校英語はどちらかというとなりでの個人的なやりとりの英語，ビジネス英語はビジネスパーソンとしてビジネスの場面での企業を代表して行うやりとりの英語，という違いを実感するようである。また，記述式ということで英作文の問題を難しく感じるようであるが，受験し合格して良かったとの感想を述べる学生が多い。

なお，2000年度前期末実施した授業アンケートでは，5段階で授業評価は4.0，満足度は4.1であった。授業で良かった点として，「試験をうけなければいけない」，「商業英語の資格取得を目標として掲げたこと」，「商業英語検定を受ける機会があったこと」，「授業目的（商業英検取得）が明確だった」，「目標が明確。商業英検を取得できる講義であったところ」，「英語

についての関心が深まった」などを挙げており、商業英語（国際ビジネスコミュニケーション）検定試験対策を行っていることに前向きの評価があったものと受け止めている。

(2) TOEIC

TOEIC についても、受験した受講生から感想を求めたところ、次のとおりである。

—リスニングでは、速聴速解の訓練をしないと対応できない。リーディングでは、速読と語彙の訓練、さらに問題形式への慣れが必要。

—かなり難しいと思った。長文の読解問題にかなりてこずり、時間が全く足りなかった。

—問題数が多く、難しかった。

—思っていたよりも問題数が多くて時間がなくてあせった。

—毎回思うのは疲れるなあということ。

—時間が長くて集中力が切れてしまった。

—200問ぶっ通しなので、集中力がもたなかった。

—リーディングは、わからない単語がかなり多くあったので、勉強不足だと実感した。

以上から、多くの受講生が難しいと感じており、これは出題形式や2時間で200問という問題量の多さに慣れていないことが一因と思われる。また、集中力も求められているようである。さらに、「TOEICをはじめて受けた受験者が『リスニングが速くてついていけなかった』『リーディングが多くてやり残した』と口をそろえて言うところの『情報のスピード処理能力が要求される』のである」¹⁷⁾ という意見もあり、英語の運用力のみならず、集中力そして情報のスピード処理能力も問われるテストといえそうである。

なお、2000年度前期末実施した授業アンケートでは、5段階で授業評価は4.3、満足度も4.3であった。授業で良かった点として、「リスニングの練習が充実していた」、「リスニングがたくさんあったので力がついた」、「リスニング問題をディクテーションするところ」、「ディクテーションがあったので何をいていたのかよくわかった」、「目標が明確だった」、「一つの問題をとっても奥深く教えてくれたこと」、「答えを合わすということが目的ではないこと」などを挙げており、TOEIC 対策を行いながらも工夫や改善を試みていることがこうした評価となったものと受け止めている。

IV. 検定・資格試験の問題点

1. 商業英語（国際ビジネスコミュニケーション）検定試験

1993年度の20,224人をピークに受験者数は減少の一途を辿っており、1999年度は6,885人

17) 千田潤一『TOEIC テストスコアアップ体験記——私の目標と英語学習法——』, ジャパンタイムズ, 1998年, 17ページ.

とピーク時に比べ34%にしか満たない状況である。受験者数の大幅な減少の原因として、「多くの英語資格試験がありすぎる」、「専修学校の凋落」という意見があり、こうした社会的な変化に一因があるのかもしれない¹⁸⁾。

特にC・Dクラスでの落ち込みが著しいため、主催団体の日本商工会議所では、各地大学に対し、C・Dクラスについては、所在地にある商工会議所が当検定試験を実施していない場合に受験者が5名以上に達していればその大学を試験会場とすることができる「直接実施制度」、また、Dクラスについては、この条件を満たしていればその大学の都合にあわせて試験日を定め実施できる「随時試験制度」を導入して、受験勧奨を行っている。

C・Dクラスの出題内容を見直したことについて、「改定内容は英語の読む力と会話の表現力に重点がおかれている。現場（大学生）の実状から見れば、その方向性は逆である。英語の『話す力』よりも『書く力』が不足している」¹⁹⁾との意見がある。筆者としても、①電子メールが日常的に使用されてきている今日書く力を高めることがますます重要になってきている、②C・Dクラスの試験時間が短くなりそして出題数が減ったことにより全体的に従来より易しくなったのではないか、ということ述べておきたい。

2. TOEIC

TOEICについて、次の説明文を引用することにする。

「英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界基準のテストです。最大の特徴は合格・不合格ではなく、受験者の能力を10～990点で評価することです。そのスケールは常に一定であり、受験者の能力に変化がない限りスコアも一定に保たれます。これにより受験者は正確に現在の英語能力を把握できたり、目標とするスコアを設定することが可能です。」²⁰⁾
(下線は筆者)

この中で、①能力に変化がない限りスコアも一定に保たれる、②正確に現在の英語能力を把握できる、③目標とするスコアを設定することができる、と説明されている。

まず、①および②について、三枝幸夫早稲田大学教授は「TOEICの問題形式に慣れていない受験者の1回目のスコアは下がる傾向がある」²¹⁾と述べている。つまり、能力に変化がなくても、1回目のスコアは受験者の実力よりも低くなる傾向があるという。測定誤差として±25点があるとされているが、「はじめてTOEICを受けた人はたいていそのスピードと量に圧倒されてパニック状態になり、実力以下のスコアが出てしまうということだ。……1度目と2

18) 拙稿「商業英語検定試験のあり方についての一考察」(『日本商業英語学会研究年報』第56号, 日本商業英語学会, 1997年) 70ページ参照。

19) 『日本商業英語学会関西支部ニューズレター』, 日本商業英語学会関西支部, 2000年5月, 1ページ。

20) TOEIC 運営委員会が作成した「TOEIC テスト案内」より引用した。

21) 『TOEIC Friends』第2巻第1号, 国際コミュニケーションズ, 1996年1月, 26ページ。

度目では人によって100点、多い人は200点くらいのスコア差になることもある²²⁾と1回目では±25点の測定誤差を大幅に上回る低いスコアになるという分析結果が出ている。

千田潤一 TOEIC Friends Club カウンセリング・ディレクターは、「今 TOEIC が400点の人も450点の人も、スコアは50点違いますが誤差±25点の範囲だから実力的には同じだと言えます²³⁾という。これは、例えば、ある受験者の英語能力が400の場合、±25点の測定誤差を考慮すると、スコアの変動は375点～425点となり、別の受験者の英語能力が450点の場合425点～475点となり、計算上は両受験者ともに425点の同じスコアとなりうるからであろう。

「能力に変化がない限りスコアも一定に保たれる」、「正確に現在の英語能力を把握できる」というが、一方で1回目のスコアは下がる傾向があること、また±25点の測定誤差があり50点の違いがあっても実力的には同じであるということを受験者のみならず利用している企業・団体に対しても周知徹底を図る必要があるように思う。

③について、筆者は「結果がスコアで示される場合、英語力測定の『ものさし』としての意味はあろうが、目標設定や対策の面でグレード別になっている検定試験とは異なるので同列には論じられないであろう²⁴⁾と考える。これは、これまで商業英語（国際ビジネスコミュニケーション）検定試験および TOEIC の受験対策を授業で行ってきた経験に基づくものである。商業英語（国際ビジネスコミュニケーション）検定試験の場合、出題の範囲や程度が設定されているので、前期 D クラス、後期 C クラスとグレード別に対策を行うことができる。しかし、TOEIC では、グレード別になっていないので同じような対策をとることができない。また、商業英語（国際ビジネスコミュニケーション）検定試験の場合、D クラスそして上位の C クラスと段階的に学習ができるし、また、それぞれのクラスに合格したときの目標の達成感というものがある。千田氏は「学校教育ではアチーブメント的なテストが必要ですから、もしかすると英検のほうが合っているかもしれない²⁵⁾と述べているように、英検はじめ商業英語などの検定試験の学校教育上の意義は大きいのではないだろうか。

受験者のスコアの動向について調べたところ、スコアが伸びる直前に50点以上低下した事例がみられる。

これらのグラフから、次のことがいえる。

A さんの場合—775点から605点へと170点の低下

B さんの場合—525点から455点へと70点の低下

C さん、D さんの場合—それぞれ、470点から405点、665点から600点へと、65点の低下

E さんの場合—830点から780点へと50点の低下

22) 千田、前掲書（注17）、14ページ。

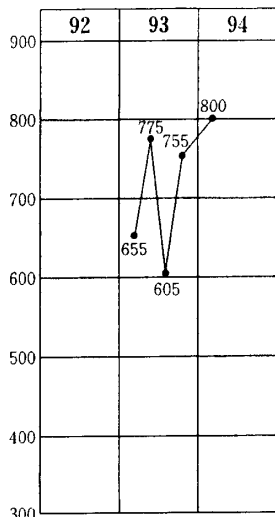
23) 『TOEIC テスト実戦パック 学習法ハンドブック』、増進会出版社、1998年、7ページ。

24) 前掲論文（注18）、73ページ。

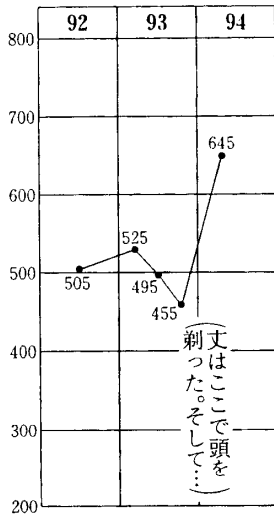
25) 前掲書（注23）、9ページ。

[5 人の事例]

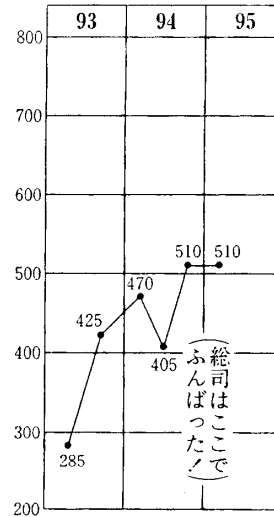
A さん



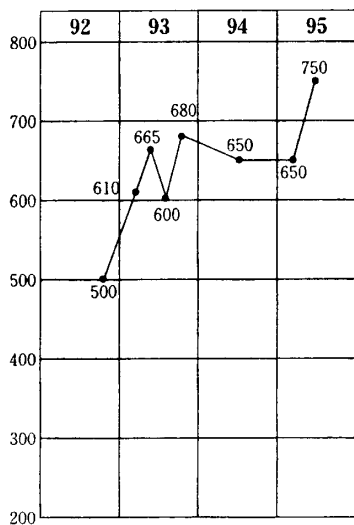
B さん



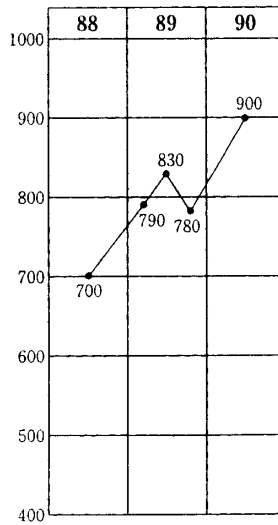
C さん



D さん



E さん



出典：千田潤一『使える英語をモノにする本』（国際コミュニケーションズ）

E さんは、測定誤差±25点があり50点の違いがあっても実力的には同じということで説明がつくのもかもしれないが、A～D さんの場合はいずれも50点を上回る違いであり、英語能力自体が低下したことになるのだろうか。 TOEIC を目指して学習するための心得として、「英語は勉強ではなくてトレーニング、スポーツのような感覚」²⁶⁾ という意見がある。これは、「習うより慣れろ」とか國弘正雄東京国際大学教授が「慣れるまで習え」²⁷⁾ というように語学

26) 千田潤一『使える英語をモノにする本』, 国際コミュニケーションズ, 1995年, 118ページ.

27) 前掲誌 (注21), 6 ページ.

は慣れ親しんで身につけるといふ先達の教えとも共通点があるようである。英語とはスポーツのようにトレーニングすることであるとするならば、このスコア低下はスポーツでいうところのスランプに例えられるのかもしれない。

受験対策について、TOEIC 運営委員会では「TOEIC に対する受験対策をいかに行っても、英語能力の変化がない限り、スコアは変動しない」²⁸⁾と述べて、付け焼き刃的な受験対策は通用しないという。しかし、一方では「TOEIC や TOEFL でスコアを伸ばすのは、一種のテクニック……。TOEIC は、受験回数をこなせば絶対スコアが上がる」²⁹⁾という意見がある。こうした意見に対して、同運営委員会では「英語学校または市販の英語プログラムによって、TOEIC の類例を数多く練習することは必ずしも無駄ではありません。たとえば、Listening にしろ、Reading にしろ、TOEIC に出るようなスピードで聞く練習をし、速いスピードで読む練習を数多く重ねれば、自然とスピードに慣れてきます。これは、当初の動機または目的は TOEIC 受験対策であったとしても、実は、きわめてまともな英語学習であり、この練習によって TOEIC スコアが上がるのであれば、それは英語の実力がついたことを示しているのであって、付け焼き刃によってスコアが上がったものではありません」³⁰⁾と説明している。付け焼き刃的な受験対策は通用しないとしているが、出題形式や時間配分に慣れるとともに類例を数多く解くことにより解き方のコツが掴めればスコアアップが期待できるように思われる。

TOEIC ではリスニングとリーディングしか出題されないことについて、TOEIC 運営委員会は「予め Listening と Speaking との相関関係、Reading と Writing との相関関係を実際の受験者を使って検証し、Listening と Reading から Speaking と Writing を含めた英語力が測定できることを統計的に証明している」³¹⁾と説明している。しかし、鈴木祐治慶應義塾大学教授は「基本的には受信型のテストであって、発信型のテストではありません。よってリスニングやリーディングは直接測ることはできますが、そのほかは間接的にしか推察できません」³²⁾と述べており、ライティングやスピーキングのテストが含まれていない点はマイナス部分として否めないようである。筆者としては、速読・速解を否定するものではないが、沢山の設問に解答しなくてはならないため大意を掴むことが求められ、リーディングでは問題を解くキーワード探しに終始して、きちんと内容を理解することが疎かになってしまうのではないかという懸念を抱いている。リスニングでも「質問の意図を即座に読み取る速読力が

28) TOEIC 運営委員会が作成した「TOEIC Q & A」より引用した。

29) 『EXECUTIVE』第35巻第5号、ダイヤモンド社、1998年5月、35ページ。なお、この意見を述べた近藤緑さんは TOEIC 885点をとっている。

30) 前掲資料（注28）より引用した。

31) 同上資料より引用した。

32) 『PD マガジン』第5号、全国大学生生活協同組合連合会、1995年3月、10ページ。

大きくスコアに影響している」³³⁾といわれており、スコアをよくするための対策だけやっていたのでは本末転倒になってしまうであろう。

V. お わ り に

学校英語と検定・資格試験とのあり方について、筆者は次の意見に注目したい。

「英語の資格試験や検定試験なるものの多くが学校英語に対する反省の上に成り立っているのも事実ではあるが、両者がアンチテーゼとして対峙すると考えるのではなく、相互に補完するもの、学校で求められているものと資格試験や検定試験で求められているものの双方が英語力向上に不可欠なのだ、と考えるのがより自然だろう。」³⁴⁾

英語教育関係者の中には、平等が原則の公教育に営利的利益が絡む、現行資格試験のテスト方式に疑問などという問題提起³⁵⁾がみられる一方で、「目的意識が明確で、実際に英語を使いたいという人にとっては、テスト自体がモチベーションを高める手段になるのである」³⁶⁾、「正規の教育機関外の学習成果を評価することは、学校教育の相対化へ導く」³⁷⁾という意見もあり、賛否両論があるようである。

こうした中、1999年3月の文部省告示第64号にて、大学の多様化・個性化の一環として TOEIC および TOEFL が大学の単位認定の要件として認められることとなった。筆者は広義のビジネス英語教育の視点から TOEIC を授業に導入してきたが、これからはビジネス英語教育のみならず広く大学英語教育においても TOEIC の新たな位置づけが検討されることになる。因に、筆者の勤務校においては1999年度から資格取得学生表彰制度が施行され、商業英語（国際ビジネスコミュニケーション）検定試験では B クラス以上、TOEIC ではスコア730点以上が表彰の対象となることとなった。

筆者はビジネス英語教育に携わる者として、実社会を睨んだ実学的な視点で検定・資格試験を捉える立場をとるものである。実社会においては、信教授が述べているように、(1)社会的に評価の高い商業英語検定や実用英語技能検定の1級などの方がより客観的に技能が判定できる、(2)企業側としてもできる限りすでに高度な運用力を身につけた学生を雇用し即戦力に

33) 長崎玄弥・森田勝之『TOEIC の英語』, 荒竹出版, 1992年, 38ページ。

34) 岡田成文「もっと知りたい資格試験の英語」(『時事英語研究』第52巻第9号, 研究社出版, 1997年12月) 10ページ。

35) 高橋正夫「資格試験と英語教育政策」(『現代英語教育』第32巻第12号, 研究社出版, 1996年3月) 9-10ページ参照。

36) 吉田研作「各種英語資格認定テストに挑戦——英検, TOEIC, TOEFL など, その傾向と対策」(『大学生の英語学習ハンドブック』, 研究社出版, 1999年) 140ページ。

37) 田中慎也「Q & A 資格試験の基礎知識」(『現代英語教育』第32巻第12号, 研究社出版, 1996年3月) 29ページ。

活用したいと願うのは当然なことであり検定試験制度はそれを測定する指針として重要な役割を演じている、といえよう³⁸⁾。

英語教育の視点からはいろいろな意見があるようであるが、検定・資格試験の社会的な使命や意義などにも目を向け、より広い視点から論じることが必要であるように思う。大学生の場合、卒業後その多くが社会人になることを考えると、アカデミックな議論のみならず社会のニーズをも踏まえて、検定・資格試験のあり方を検討して行くべきであろう。

最後に、筆者のいるような地方の大学生にとって、統一した基準によって実施される検定・資格試験は都会と比べると閉鎖的で仲間意識の強い地方社会の中にあって他流試合的な意味合いがあり、全国規模で自分の実力を試すよい機会として学習の励みにもなっていることを付言しておきたい。

38) 信 達郎「日本の実務者向け各種英語検定についての一考察」(『日本商業英語学会研究年報』第55号, 日本商業英語学会, 1995年) 28ページ。